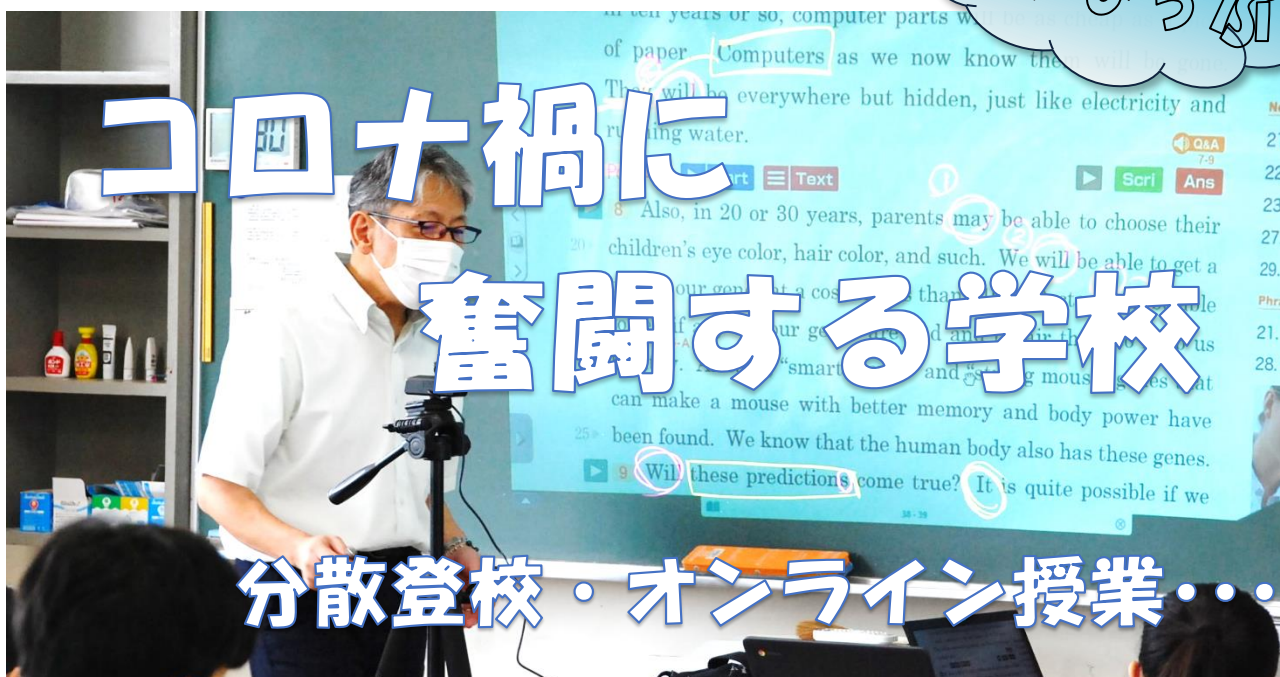


さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように  
群馬の教育や文化の話題を普段着のまま紹介するシリーズ



今年4月に開校した「新」桐生高校では、各種機材を用いて授業が行われていました。

コロナ感染防止にともなう緊急事態宣言により、県立高校では二学期の始業から分散登校とオンライン授業を行うことになりました。県からの通知は8月17日。翌週から二学期が始まる学校もあり、夏期休業中とはいえ現場には多くの戸惑いの声が上がりました。

先の通知によると「分散登校」とは、感染拡大防止の観点から「例えば、学年または学級を2～3グループに分け、曜日や時間を指定して週2～3日程度登校させる」とのことです。生徒の出席番号の奇数偶数で2分割する方法が多くの学校で採られているようですが、中には奇数クラスと偶数クラスが交互に登校する学校や、学科や系列ごとに登校日が決められている学校、男子と女子で登校日を分ける学校もあり、対応は様々です。週5日間のうち3日登校する人と2日登校する人がいる場合は、2週間を一括りにして登校日をならず工夫も見られます。

そして、登校しない日の家庭学習のために、多くの学校でオンラインによる課題の配布や授業のライブ配信を行うことになりました。

昨年度3～5月の休校期間の後、各校では分散登校を経験しているとはいえ、感染収束の目途が見えない中で、これまでの学習を二学期以降どう継続するかへの対処を急遽求められたので



約半数の生徒が市松模様のように間隔を空けて座る

す。9月3日付上毛新聞「県立高で遠隔授業学びの質維持に奮闘」の記事には、その対処の仕方を含めた各校での様々な工夫や当面する課題が紹介されました。ぐんま教育文化フォーラムでも、現在の学校現場を取材することで、今後の検証に役立てたいと考えました。そこで、上毛記事でも取り上げられ、県内公立高校として現在最多の生徒が在籍する桐生高校（28クラス1120人）を取材することにしました。

## 桐生高校を取材して

コロナ下での学校への訪問取材は困難と思われましたが、フォーラムからの取材要請を快く引き受けて下さったのは今年度から桐生高校の教頭を務める星野亨先生で、取材日時は9月8日午前10時から約1時間半でした。

桐生高校では8月26日から二学期が始まり、分散登校による授業が二週目を迎えました。以下に、星野教頭先生の説明をQ&A形式にまとめました。

**Q. 桐生高校では、授業はどのような形態で実施していますか？**

A. 出席番号の奇数偶数に二分して、全学年生徒が分散登校です。月水金を奇数生徒、火木を偶数生徒が登校する週と、その翌週はその逆パターンで登校する週の2週で1セットとして、登校日数に偏りが出ないようにしています。登校した生徒は、教室で机を一つずつ空けて着席します。登校日ではない在宅の生徒は、校時表通りに行われる授業にGoogle Meet(\*1)を使ってオンラインで参加します。チャット(\*2)を使って出欠確認をします。登校した生徒はこれまで通りの授業を受けますが、教室内に設置したカメラとマイクで先生の声や板書事項などが在宅生徒に送信されるため、基本的には登校生徒と在宅生徒が同じ授業を同時に受けていることとなります。昨年度の分散登校ではオンライン授業の環境が整わなかったため、二分した生徒にそれぞれ一回ずつ同じ授業をしていましたが、それでは授業の進度や効率に大きな問題がありました。また、教員の手元にあるパソコン内蔵のカメラでは、黒板全体を撮影するのが困難で、



黒板には板書の他にプロジェクターの映像も



耳にインカムをつけて授業

教員の姿や声など授業の様子を送信するのに適していないことがわかりました。そのため、今回の分散登校に際して、オンラインの環境整備のために各教室に設置するマイク内蔵カメラと三脚の購入をいち早く決め、貸し出し用ルーター30台を用意しました。そのため、現在では対面とオンラインの同時並行で授業を実施できています。

**Q. 在宅生徒の出欠席の扱いについてはどうなっていますか？**

A. 県教委から通知された指針に従っています。在宅生徒の出欠については「出席停止」扱いとし、欠席にはなりません。個々の教科ごとの欠課時数にもカウントされません。欠課時数は指導要録では記入欄そのものはありません。

**Q. オンライン授業の実施割合はどのくらいですか？**

A. 原則として、すべての授業で対面とオンラインの両方を同時に実施しています。会計年度任用職員で授業を受け持っている先生には、常勤職員の支援チームが必要な支援をしています。

**Q. 現在の授業形態での課題はどのようなものがありますか？また、成果はどのようにですか？**

A. 今は、あくまでこの緊急事態宣言の状況下での特別な体制です。機材（カメラ・マイク・プロジェクターなど）の整備を進めたことによって、オンライン授業が実現しています。本来、本校では1校時を60分で行っていますが、これを現在は50分で実施しています。感染拡大防止の観点から下校時間を早めるためです。一学期に実施していた始業前50分1コマの朝補習も現在は行っていません。



現在、桐生高校は全学年28クラスですが、選択科目や学校設定科目などの授業で40教室ほどを常時使用して少人数での授業を展開しています。それが分散登校によって、さらに少人数での授業となっています。

**Q. 今回の分散登校によって教員への影響はありますか？**

A. 今回の分散登校にともなうオンライン授業を実現するのに、機器の使用に長けた数名の教職員によって機器の整備と使用方法に関する支援体制を確立できたことが大きかったと実感しました。実は、学校と生徒の端末を結ぶオンラインのテストのようなものを夏休み中に行っていて、問題点などがある程度把握できていたことも、オンライン授業の実現には役に立ったと思います。

本校では、2019年に県下で一斉に導入された校務支援システム「ぐんまスクールネット(\*3)」の導入パイロット校として、以前から不具合解消のための提言を開発会社へ頻繁に行ってきました。ICT化にともなう学校での業務の変革には、これからも対応してゆく必要があると思います。

**Q. 分散登校にともなう生徒のメンタル面での影響はありますか？**

A. クラス担任によるサポートが中心です。感染拡大による休校という最悪の事態を防ぐためにも、県の指針（欠席ではなく出席停止扱い）を保護者に周知することは重要です。

**Q. 現在実施している上記以外のコロナ対策はありますか？**

A. 学校でのディスタンスの確保、検温等の健康調査、こまめな手指消毒、黙食、部活動の活動方針（大会前のみ計画・報告書提出して1時間半以内で実施）の励行などです。

**Q. 新桐生高校になったことによる変化はありましたか？**

A. 現在3年10クラス・2年10クラス・1年8クラスの大所帯ですが、旧桐高・旧桐女・新桐高の垣根をこえて一体となった学校運営を竹内校長のもとで行っています。今までに統合した学校にあるような新旧併設では

ありません。もちろん、大きな障害もなくスムーズに学校が回っているのは、統合に向けたこれまでの周到な準備があつてこそその結果だと思います。第1回の文化祭（紫鈴祭）を実施（蔓延防止措置のため6月から7月に延期して非公開で実施）することができて、新桐生高校の出発を象徴する大きな第一歩となりました。

**Q. その他として・・・**

A. 先日行われたSSH(\*4)講座で、講師の大学教授の講演時、冒頭に通信容量越えによるアクシデントが発生したが、担当職員数名が連携・協力した臨機応変の素早い対応により事なきを得たことは、探究学習を行う生徒の良き手本として講師より生徒に紹介されました。〈Q&A ここまで〉



教室を自由にレイアウトできる新校舎

約一時間のインタビューの後、授業中の校舎内を案内していただきました。説明のとおり、半数ほどの生徒が間隔を空けて座り、プロジェクターに映し出された問題や板書事項を見ながら授業を受けています。机上のパソコンを操作する生徒やインカムをつけて授業をする先生の姿も見られました。机を寄せ合せて学習するグループワークができないので、生徒全員が前方を向いています。新高校開設により増築された新校舎では、授業の規模や使用法によって教室の大きさを自由に換えられるパーティションが設置されています。異なるデザインの制服を着た生徒が同じ教室でともに学ぶ様子に、新桐生高校の今の姿を強く感じながら、取材を終えました。

## 《語註》

- \* 1 = 生徒のパソコン(ChromeBook)に入っているGoogleの会議用ソフト。在宅で授業に参加する生徒たちと教室の先生を結ぶ。
- \* 2 = 授業を視聴しながら短文を送受信する機能
- \* 3 = 生徒の学籍・成績・出欠管理や調査書作成などの校務全般を一括して行う県内汎用のクラウドシステム。
- \* 4 = スーパーサイエンスハイスクール。文部科学省が科学技術や理科・数学教育を重点的に行う高校を指定する制度。桐生高校は2007年度から指定。



教室で各自のパソコンを使う生徒

## 各校の状況は？・・・

桐生高校では比較的スムーズに分散登校とオンライン授業が行われているようでしたが、そのような学校ばかりではないことが、フォーラムに寄せられた声からわかりました。二学期開始早々に届いたそのうちのいくつかを紹介します。

◆来週から2学期です。夏休み中にオンライン授業の研修会は受けたものの、実際にしてみないと分かりません。9月12日以降もずっと分散・リモートなのではないかと感じている職員が多いようです。(中毛)

\*就職試験が9月16日から始まるので、面接練習等もあり、分散登校ですが始まってすぐにあわただしくなります。(北毛)

◆来週から始まるオンライン授業では、ChromeBookを使って個々の授業を約半数の在宅の生徒に同時配信する予定です。教卓の前に置いた端末で録画・録音し、Google meetで配信するのですが、うまくいかやってみなければわかりません。(西毛)

◆多くの他の先生は、教室で半分登校の生徒と対面で、半分はオンラインで、端末の内蔵カメラを利用して授業をハイブリッドでしているようです。黒板全体を写すと文字が小さくなるので、一部だけを写してい

ると思われます。とてもやりにくいと思います。最初のオンライン授業では、事前準備をしたにも関わらず本番になってエラーが出たためたいへんに慌てました。私は以前から、パワーポイントで授業をやっているので、カメラを使わずに画面共有で送信できれば教室以上に在宅生徒には見やすいはずですが、テストしてみると与えられた端末では「全く実用にならない表示の遅さ」「フォント環境の違いで書式が崩れて読めない」という問題があり、結局プロジェクターで映し出したものをカメラで撮影しています。端末の内蔵カメラの前に立つとスクリーンが見えなくなってしまうので、授業を始めると端末の前には立てず、生徒の様子も見られません。大きなモニタースクリーンが別にあるといいのですが…。生徒の顔や反応を見ながら、授業を進めるという通常の授業の大原則が実行できないのが困ります。(中毛)

◆まず出欠確認が大変。教室の生徒を確認し、他の生徒がリモート画面に映っているか確認。欠席生徒の中には出校停止扱いの発熱生徒やワクチン接種生徒もいるので注意が必要。授業は教室生徒の方を主に進めるしかないのですが、リモートの生徒にも気を配らなければならず、授業者の向く方向が分散してしまい、生徒も実際聞いているか確認は難しい。生徒も自宅ですから授業に集中するのは難しいだろうなあ。(中毛)

◆パソコンのインカメラで中継をすると黒板の真ん中3分の1しか使えず不便です。自腹でカメラや三脚を買いそろえ、より質の良い映像を伝達しようとしている方もいますが、本来、このようなものは学校で準備するべきだと思います。(西毛)

◆課題は、ICT機器の不足です。プロジェクターが全ての教室に設置されておらず、授業で使用したい場合に使っていない場所から持って行くしかありません。そのため、オンライン授業では、生徒は基本的にはカメラで写した板書を見ながら授業を受けます。文字の大きさや光の加減などで上手く見えない生徒もいたようで、授業後に板書を写真に撮り、クラスルームに投稿するという方法で補いました。(西毛)

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

コロナに苦悩し奮闘するこのような先生たちの声が渦巻く現在の学校で、校内ICT担当をする深井寛男先生(新田暁高校)から詳しい現状報告をいただきました。

## コロナ禍の学校現場で 思うこと 深井宣男 新田暁高校

2021年8月下旬、コロナ禍が拡大する中、教員も生徒も（県教委も）手探りの状態で、分散登校での2学期が始まりました。校内のICT担当と教科（理科・生物）担当の眼から見た学校の今を、雑駁に記します。

### 生徒が取り残されないか心配

学校の通信設備や学習端末（ChromeBookなど、以下端末と表記）が配備されて半年、各校のICT担当は苦勞が絶えなかったと思います。生徒への端末の配布、初期設定と基本アプリの使い方の説明、教員へのレクチャーも時間のかかる仕事でした。そして本格的なリモートが始まった今回、開始早々の通信障害です。想定外と言えばそれまでですが、結局「やってみなくちゃ分からない」という状況だったわけです。家庭の状況も同様でした。スマホの普及もあり、Wi-Fi環境が整っている家庭が多いので、事前調査ではリモート授業に支障のある生徒は本校にはいないはずでした。ところが実際に使い始めてみると、朝のSHRや授業でMeet（テレビ会議アプリ）に不参加や途中退出の生徒がいて、なかなか全員揃いません。生徒も教員も苦勞しながらどうにかやっていますが、完璧なリモートは難しいのが本校の現状です。人数は多くはありませんが状況は千差万別なので、不参加授業の個別のフォローは困難ですし、そういった生徒が取り残されないか心配です。また、登校が散発的になるため、学校から気持ち離れてしまう生徒も出てきそうです。

教員アンケートからは別の心配も浮き彫りになりました。登校した生徒とリモートの生徒を同時に相手にする授業はとにかくやりにくい。不慣れなせいもあるとは思いますが、授業のポイントが絞りにくく、むしろ全員リモートの方がやりやすい場合があるかもしれません。リモートでは生徒の理解度が低いのではないかと心配する声も多かったです。教室にいる時

に比べ、画面越しだと「油断」している生徒が多いようにも見えます。

### 生徒アンケートで見えること

分散前の1学期末に実施した生徒アンケートでは、やる気が起きて理解しやすい授業形態は「グループワーク」と「ICTの活用」が多数意見でした。「グループワーク」については、リモートであれば飛沫の心配なしに発言可能ですが、教員側のスキルが壁となり、実現は簡単ではありません。一方、「ICT」の方は嫌でも活用を迫られています。生徒にとっては、端末を利用した学習はテレビやゲーム感覚で取り組みやすいのかもしれませんが、学習へのハードルが下がるのはアプローチの一つとしてはいいかもしれませんが、端末学習が内容の理解や学力にどう結びつくのかについては疑問もあります。1学期の定期テスト前に、端末で取り組む練習問題を配信しました。生徒の反応は良かったのですが、残念ながら、今までの生徒よりテストの成績が向上したという手応えは感じられません。まだまだ工夫が必要なようです。

### 仮想体験と実体験は別物

あらためて実物の強さを感じた事例もありました。血液の学習の際、ザリガニを教室に持ち込んで、腹部の血管を透かして青い血液を見せました。生き物が苦手な遠巻きに見ている生徒もいましたが、青い血は印象に残ったようです。写真や動画で見る仮想体験と実体験は、やはり別物なのだと思います。

教員のICTスキルが向上すれば、生徒の理解度に応じた個別のアプローチが容易になるのかもしれませんが、当面は手探りでもがく状況が続きそうです。生徒自身も、受け身だけでは学校とつながれず、自分からアプローチすることを迫られます。大学生のように大人扱いすることはいいと思いますが、手厚いフォローが必要な生徒がいるのも事実です。文字どおり、学校と家庭、教員と生徒のつながり方が、問われているような気がします。（了）

## この経験を未来に生かすために

学校現場では、未だ経験したことのない様々な事態に生徒や先生は日々翻弄されています。しかし、感染の波が繰り返し押し寄せる中で、やり直しのきかないこの時期を過ごす生徒たちの学びを止めることは許されません。今回の取材や各校から寄せられた情報にあるような先生たちの苦悩と奮闘は、これからも当分続きそうです。

その一方で、いわば異常事態が続く今だからこそ、教育を取り巻く多くの課題が顕在化し、それに対する工夫や知見、成果が積み上がっています。その一例として、全国の公立小中学校の事務職員を対象とした「COVID-19に関する緊急アンケート」(2020年6・7月実施)の調査結果がネット上で閲覧できます。

(<https://www.gakuji.co.jp/pdf/gakkojimu-covid-19-enquete-2020.pdf>)ここには学校現場での対応・課題・工夫・成果等が詳しく記されています。ぜひご一読下さい。

オンライン授業の課題は、文科省「全国学力・学習状況調査(2021年度)」からもうかがえ、10月7日付ニューズウィーク日本版「オンラ

イン授業の拡大を妨げる家庭のIT環境格差」(舞田俊彦)でも詳報されています。それによると、2020年4月以降の臨時休校中、家庭でのICT学習に際して「家庭の端末、機器、通信環境の不足で困ったという小学校の割合を都道府県別に出すとかなりの差異がある」とし、「家庭のリソース不足で悩んでいる学校の割合は、地方で高い傾向にある。各県の県民所得とマイナスの相関関係があり、子どもの貧困の影響も透けて見える。」と分析しています。

さらに、コロナ関連での「出席停止扱い」をめぐり、推薦書類作成時の今になっても文科省の指針が揺らいでいて、現場の混乱に拍車をかけている有様です。

コロナ禍で「1人1台端末」の前倒し配布が進み、授業などでの活用の場面も徐々に増えています。しかし、端末を学習材としてオンライン授業などで使うに際しては、今回フォーラムに寄せられた情報や上記の記事にある様々な課題を克服する必要があります。そして、コロナ収束後の学校でこの端末をどのように使っていくかの検討も、これまでの課題や成果を検証した上で、しっかりと進める必要があります。

## 取材を終えて

9月13日に開かれた県教委9月定例会議で、教育委員の一人から県立高校のコロナ対応(分散授業など)の状況を問われた担当課長が「数校に聞き取りをしたが順調に進行している」と回答するのを聞いて、啞然としました。普段、類似した調査を担当部署ごとに乱発し多忙な現場に即時回答を求める県教委ですが、この点に関してはいたってのんきなもので、設置者としての当事者意識が微塵も見えません。

その一方、7月の「GIGAスクール構想に関する教育関係者へのアンケート」(デジタル庁実施)の結果報告(<https://www.digital.go.jp/posts/NL3IOB9E>)では、全国からの現場の声を受けて、「目指す学びの姿の欠如/提示不足 加えて、GIGAスクール含む教育政策を評価・検証する仕組みが未整備であることも課題」(原文ママ)との分析結果を掲げました。これは、早くも暗礁に乗り上げたGIGAスクール構想に対する、新規まき直し策の布石とも考えられます。「1人1台端末」には今後の使い方次第で多様な可能性もありますが、「学びのツールの一つ」としての本来の意義がどんどん肥大化し、端末を使うこと自体が目的化してしている現状もあり、たちまち陳腐化する端末の更新問題とBYOD(端末の自己調達)問題と併せて、課題と成果の記録と検証を積極的に進めるべきです。そして、何より大切なのは、コロナ禍中でとかく見過ごされがちな子どもたちの声に私たち大人はもっと耳を傾けるべきだ、ということではないでしょうか。

最後に、毎日息つく暇もない校務を差し繰って取材や情報提供に応じて下さった多くの方々に、この場をお借りして心よりお礼を申し上げます。

〈文責＝「育ちと学び」編集部〉